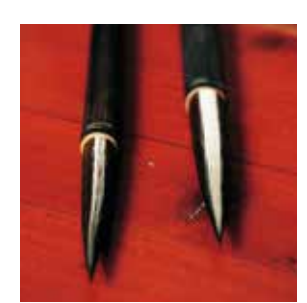


王 伝統の手技

第十五回

「筆は、筆そのものでは成り立たない。使う人がいて筆は筆たり得る」。天然の動物の毛にこだわり続け、使う人へ最良の筆を生み出す亀井正文さん。

江戸筆は根元まで崩して使う。だから筆を糊で固めない。3分の2を固める関西、3分の1を固める中国とは、そこが違う。ミンクの毛、山羊毛などの毛を使うには理由がある。



書き手がいて、職人がいる。相手を考えない筆作りは失格だ



身延山久遠寺に五重塔が完成した折、8万字が写経されたが、その際に使用されたのが亀井さんの筆だった。写真は柳田泰山(寧一)さんが2年かけて8万字を写経し、寺に納経した8巻目の一部分を額装したもの。

70年代に映画『トラック野郎』シリーズで一世を風靡したアートトラック(通称デコトラ)。派手なペイントと、これでもかという電飾をちりばめた改造ボディは当時、社会現象にもなったほどだ。

と、そんなデコトラの製作から、筆作りへと転身した職人さんがいるという。しかも江戸から続く書道界の名門、四代目柳田泰山氏や、人気書道家の武田双雲氏から絶大な信頼を受けている、と聞けば興味が湧かぬはずがない。というわけで、武蔵野三大湧水地・石神井池と三寶寺池が豊かな水をたたえる石神井公園のほど近くで工房を構える江戸筆職人、亀井正文さんを訪ねることに――。

出迎えてくれた奥さまに案内され、6畳の仕事部屋へ。胡坐をかがいて筆に向かう亀井さんの柔らかな物腰に、勝手に思い浮かべた「いかつそうな元デコトラ職人」の風貌が一瞬にして吹き飛んだのは言うまでもない。それにしても亀井さん、ずいぶんと、こぢんまりした仕事場ですわね？

「昔は家内とふたり、差し向かいで仕事をしていたんですが、息子が弟子入りしてからは3人になりましたから……さらに狭くなっちゃいましたね」
そんな亀井さんの横でニコニコりうなずく久子夫人。夫が筆職人の世界へ飛び込んで30数年、共に歩んできた二人は夫唱婦随。いや、欠かすことのできない相棒といった雰囲気だ。

江戸時代中期に関東に伝わった江戸筆は、「捌き筆」といつて根元まで崩して使うのが特徴だ。そのため、筆の毛には柔らかさと腰の強さが求められる。だが、近年は筆作りの世界も大量生産とコスト削減のため、ナイロンなどの化学繊維を毛に混ぜている場合が多いのだとか。

「筆というのは、保墨といって毛で墨を保ちながら、徐々に墨を紙に落としていくもの。それがたとえ20%でもナイロンが入っていると、墨がナイロンを伝ってストンと落ちてしまうんです。動物の毛なら7文字書けるところ、ナイロンが入っていると3文字目くらいで墨が切れてしまい、文字じたいの勢いが変わってしまいます」

ところで、江戸筆「亀井」の四代目として、その名を馳せる亀井さんだが、実は筆作りは「絶対やりたくない仕事」だったのだか。

デコトラ製作から筆職人への大転身

身延山久遠寺に五重塔が完成した折、8万字が写経されたが、その際に使用されたのが亀井さんの筆だった。写真は柳田泰山(寧一)さんが2年かけて8万字を写経し、寺に納経した8巻目の一部分を額装したもの。

匠 伝 統 の 手 技



亀井正文
Kamei Masahumi

1949(昭和24)年、東京生まれ。明治から始まった筆匠の家系に育つが、「家業を継ぐ気持ちがなかった」ことから高校卒業後は、自動車の改造工場に就職。75年からシリーズ化された東映映画「トラック野郎」で、主演の菅原文太扮する星桃次郎の愛車「一番星」の製作に携わる。その後、埼玉の工場に移るが、仕事上の怪我で退職を余儀なくされ、25歳で「名人」といわれた三代目の父・亀井清に師事。「きちんと胡坐がかけられるまでに3年」といわれる修業時代は試行錯誤の繰り返しで、初めて自分ひとりで筆を作ったのは弟子入りして15年目のことだった。平成11年には東京都知事より伝統工芸士に認定。扱う筆は書道用をはじめ、蒔絵や人形作りなどの工芸用ほか、1000種類以上。パソコンで管理する顧客リストには、プロの書道家をはじめ、工芸作家、絵師など2万5000人が登録されている。現在、長男で弟子の暁央さんを五代目後継者にすべく、その育成に努めている。

東京都練馬区石神井町5-14-2
TEL:03-3996-5046 http://www.edofude.co.jp/



左から、毛先を揃える寄せ金・手板。毛をそろえるときに使う金櫛。「さらい」で使用する小刀。鋏。ケースに入っているのは芯の太さを測るツボ。



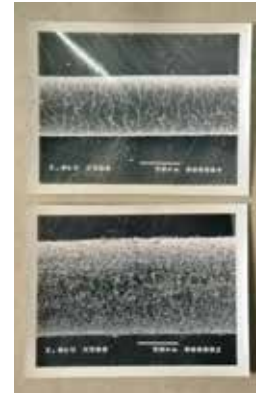
日本画用筆の各種。



工芸用筆の各種。



書道用の筆各種。亀井さんが作る穂先は、書道用、工芸用、日本画用を含めるとざっと1000種類以上あるという。



電子顕微鏡で見た毛の表面。上がミンク、下は山羊毛。手揉みしてキューティクルを毛羽立たせる。

師匠である父親の昼寝の最中に、

仕事を盗む



「捌き筆」である江戸筆は、穂先の根元まで崩して使うのが特徴だ。「筆は丁寧に使えば、何十年でも持つんです」という亀井さんのもとには、メンテナンスの注文も多い。



亀井さんが使用するのは、ミンク、山羊毛、馬、いたちなどの天然毛だけ。写真はストックしてある天然毛。中には30年、40年前のものまでであるという。

に出た。「親父は毎日1時間くらい昼寝するわけですよ。で、その間に親父が組んだ筆の毛をバラバラにして、毛の組み合わせの配分を数式に変換してノートに書き留め、仕事を覚えていったわけですね」

さらに「個々の流派の筆使いを知るため」に、30数か所の書道教室を渡り歩き、ようやく自分ひとりで全工程を担当し、筆が完成したのは弟子入りから15年目のことだった。

ところが、念願だったデビュー作は、「山羊毛といういい材料を使っているし、手も掛けているんだけど、今見ても恥ずかしくなっちゃうような(笑)」筆だったという。

◇

しかし、努力は着実に実力を育んでいく。だからこそ、亀井さんの次の言葉に膝を打つことになる。

「書き手がいて、職人がいる」—— 亀井さんいわく、誰が何のために使うかを想定しない筆は、その時点で失格なのだという。「自己満足の筆ではなく、人が使って満足できる筆を作らないとね。そう思ったとき、筆作りが変わりましたよ」

亀井さんは書家から注文があれば展示会に足を運び、さらには仕事場を訪ね数時間仕事ぶりを見学しながら、書き手が筆を持つ位置、角度、さらには自身ですら気がつかないような癖まで見つけ出す。そうしてできあがった筆は、まるで書き手の魂が乗り移ったかのように、その技量を最大限に引き出すのだ。

「ただ、筆は僕の手を離れた段階ではまだ80%の完成度。使う方が納得する筆になってこそ完成される。つまり、筆は使い手とともに育つということですよ」

書き手の要求を十二分に読み込む洞察力と、毛の性質を熟知し、丹念な下拵えで筆の穂先に魂を注ぎ込んでいく確かな技。この二つを兼ね備えてきたからこそ、亀井正文は、筆を使う誰をもを輝かせる『道具』を生み出し続けているのだ。

※書道の世界では古くから筆、紙、硯の四品を「文房四宝」と呼んだ。弘法大師が筆作りの技術をも日本へ持ち帰ったのが806年。それが京都・奈良を経て江戸に伝わったのは江戸中期だった。その背景には町人の子供たちに「読み書き算盤」を教える寺小屋の爆発的な増加があったといわれている。

江戸筆の大まかな製作工程

- ① 選別 毛の長さ、毛先の良否、用途別に分ける。
- ② 煮沸 沸騰した湯に入れて脂を抜き取る。
- ③ 綿毛抜き 金櫛で薄皮のついた綿毛を抜き取る。
- ④ 火のし 脂を浮かし、毛筋を伸ばす。
- ⑤ 毛揉み 粗殻灰をまぶし、強く揉み上げる。
- ⑥ 毛揃え 手板をあてがい、毛先を揃える。
- ⑦ 櫛上げ 水を含ませ、金櫛ですいて形を整える。
- ⑧ 寸切り 分板の寸法に合わせ、毛を鋏で切る。
- ⑨ 先出作り 命毛と喉毛から余分な毛を取り、穂先を作る。
- ⑩ 型作り 腰毛を混ぜ、腰の形を作る。
- ⑪ 練り混ぜ 命毛・喉毛・腰毛を練り混ぜ、均一にする。
- ⑫ さらい 毛先の悪い毛をすべてさらす。
- ⑬ 芯立て 筆1本分の毛を抜き出し、芯の形を作る。
- ⑭ 上毛掛け 別工程の上毛を芯に巻いて乾燥させる。
- ⑮ 尾締め 毛の尾を糸で縛り、尻部分にコテで熱を加える。
- ⑯ 接着 筆の軸と毛(穂)を接着剤で付ける。
- ⑰ 仕上げ 筆先へのりを浸し、糸で形を整える。

亀井さんが自身で開発した「尾締め」で使用するコテ。

毛が熱いうちに糸を引き絞り、軸に接着する部分を作る。穂先の尾の部分を麻糸で縛り、コテで熱して固く締め上げる。

小刀を使って、毛先の縮れた毛や割れた毛を取り除く。毛を左手で押さえ、右手で持った「切り出し」で悪い毛をさらっていく。